大須賀秀道先生の追憶

稲　葉　秀　賢

元大谷大學學長、講師大須賀秀道先生は明治九年二月五日、靜岡縣小笠郡大須賀町の善福寺で孤々の聲をあげられた。大谷大學の前身である眞宗大學を明治三十三年七月に卒業せられ、その年の九月、直ちに大谷高等學校の前身である眞宗京都中學の教授に任ぜられた。そして大正七年九月には、眞宗大谷大學の教授に轉任せられた。眞宗大谷大學というのは、當時は專門學校令に依ていたが大正十二年四月、正式に單科大學としての大谷大學として認可せられ、先生はそのまま大谷大學教授として、實に二十年間、大學と共にその生涯を送られたのであつた。卽ち昭和二年から五年に到る三年間は專門部長を兼任して、專門部の育成に力を竭された。また昭和十三年から十六年に到る四年間は、大谷大學長として、大學の經營に專念せられた。更に十六年、學長の職を退かれてからも、なお講師として講義を續けられ、その長い生涯が全く一途な學問に捧げられたのである。昭和十九年十月一日、大谷大學名譽教授の稱號が授けられたのも、先生の大きな功績に省れば、當然のことといはねばならぬ。

然るに昭和二十七年、ご病氣の為、長年住みなれた京都を去つて自坊に歸り、靜かに病を養はれたのであつたが、遂に昭和三十七年二月十八日、八十六歳の高令を以て、その生涯を閉ぢられたのであつた。まことに如何ともすることのできない別離とは云へ、今更の如くに深い悲しみを感ぜずにはいられない。ここに先生のありし日のことを偲びながら、追憶の糸をたぐつてみよう。

私が始めて先生に接したのは、大谷大學の豫科二年のときであつた。その時は『淨土三經の概要』という講義であつたが、そのノートは今も大切に保存せられている。この年は、先生が大學に轉任せられてから、數年後で、新進氣鋭の意氣がノートの行間に溢れ、如何にも熱のこもつた講義であつたことを覺えている。その後二十年にも及ぶ先生との接觸を通して、却てこの頃の印象が最も鮮かにのこつている。率直にいつて、先生は決して雄辯家ではなかつた。寧ろ循々と說得するといつた話ぶりであつて、當時佛教學や眞宗學に何らの素養のない我々にも、解らせずにはをかぬといつた說得力があつた。それ以來、在學中は勿論何度も先生の講義を受けたが、その頃受けた感銘が最も强く刻みこまれている。而してこの頃の印象がいつまで

も強烈なのは、この頃先生が自らの内面で深い學問的苦惱を抱き、その苦惱のなかに生々しく產み出された講義だつたからではないであろうか、そして今更の如く、先生の學問的苦惱が如何に深刻であつたかを、今にして泌々と感ぜしめられるのである。

先生の講義を受けたものが凡て共通して感じたことは、先生が常にこの基盤を踏まへてそこに獨自な學風を形成していられたことである。一は傳統的な宗學に對する深い領解であり、他は近代思想の上にそれが如何に媒介せらるかを身を以て學んでいられた點である。從てその學風は徒らに新奇を好むものでもなければ、また舊套になずむようなものでもなかつた。若し近代思想にのみ眼を奪はれて、傳統的な宗義を輕んずることがあるならば、それは徒らなる獨斷に陷るであろうし、逆に近代思想に眼を掩うて、傳統的宗義にのみ固執するならば、その宗義に依て示される信仰を時代に媒介することはできないであらう。然しこの兩面の調和は妥協であつてはならず、中和であつてもならず、それは一人一人が宗祖の信仰に直參することに依て、追體驗を通して近代思想の中に融和されなければならない。こうした面に於いて、眞劍に惱まれたのは先生ではなかつたであらうか。いま私が大谷大學豫科二年の時に受けた先生のノートを取り出してみて、しみじみとこれを感ずるのである。豫科二年と云へば、現在の制度で云へば教養學部であるから、殊に眞宗學に對する素養は殆んど皆無といつてよい。その學生を對象として、淨土三經の概要を講述せられた先生のノートは、誠に簡明で要を得ていて、それこそ新を衒はず、舊になずまず我々に正しい理解を與へるものであつた。

その後大學の在學中は勿論、私が宗學院で專ら眞宗學の研究に專心するようになつてから、先生の指導を受ける機緣は愈深くなつたが、先生に接すれば接するほど、先生が內に抱いていられる學問的苦惱がいよいよ深く感じとられるのであつた。まことに先生はその生涯をただ一筋に學問に捧げられたのであつた。そして先生の學問的苦惱を通して、常に新しい課題が產み出され、その課題に就いて語られると共に、後進の為に研究の方向と問題のありかを指示せられた。先生のお宅を訪問しても世事を語られることは少く、常に書物の話や學問的課題が中心となり、また學問の世界の嚴しさを語られることが多かつた。殊に自らが當面している課題に就いて語られる時の先生は別人のようであつて、平素は喜怒哀樂の情を表に出されないに拘らず、この時は熱情であの溫顏が紅潮するほどであつた。

先生の學問が新奇を衒はず、舊套になずむことがなかつたように、人間關係にあつても先生は常に不偏不黨であつた。われわれが學生時代に先生のお宅を訪問した時にも、親しみの中に禮を失はず、全く輕んずる風がなかつた。先生の大學在任は二十數年の長きに及び、その間大學にもいろいろの事件があつた。特に大學の方針が政治問題と絡むときには、それぞれの黨派が却て外側から問題にされることが多い。然しそうした場合にも、先生の態度は常に不偏不黨であつた。ある事件の起つた頃に、或人が

「先生は何派ですか」

と問うと、先生は直ちに

「私は大谷派だ」

と答へられたという話が傳へられている。まことに先生の面目躍如たるものがある。

先生はまた美しい信心の人であつた。といつても、特に常と變つた行儀を示されたというのではない。寧ろ極めて平凡な念佛者であつて、そこに信心の人としての美しさがあつた。我々は先生が怒られたことを餘り見たことがない。常にあるがままで幸せを見出してゆく信心の智慧が輝いていたからではないであろうか。殊に晩年病床にあること實に十年の長きに及び、しかもパーキンソン氏病という稀らしい病氣、全く身體の自由を失はれたのであつた。從つてその間專心看護の任に當られた奥様の勞苦は察するに餘るものがあるけれど、その奥様の談によると、先生はその長い病床生活で一度も愚痴をいはれたことがなかつたということである。これほど美しいことが何處にあるであろうか。

凡そ人間の價値は病床に於いて最もよくあらはれると言はれる。病氣の種類によつては堪えられぬ病苦に責められることであらうし、先生のように、身體の自由はきかなくても病苦のない場合もある。何れの場合にしても、病苦を訴へることは止むを得ないにしても、病氣に對して愚痴を云い、周圍の人々に不足を云う人は、平素どんな立派なことを云つたとしても、價値のある人とは云へないであろう。何故ならそこには病氣に隨う智慧がないからである。病にあつて却て病に感謝し得る智慧、周圍の配慮に對して手があはされる智慧、その智慧に護られて、どんな病苦の中にも幸せを感ずる智慧を持つ人は美しい。先生は實にこうした美しい智慧に護られた人であつた。奥様の話に依ると、晩年にはお食事などほんの少量を攝取されるのみであるが、三度三度それを非常に喜んで、どんなものをさしあげても美味しいと云はれたとのことである。そして自ら述懐せられるには

「自分ほど幸せなものはない。身體の自由はきかないけれど、こうして三度の食事は待ち遠いほど美味しく頂けるということは、本當に有難いことである」

と常に云はれたとのことである。そして靜かに念佛せられたという。これに依ても先生が如何に美しい信心の人であつたかが知られることである。

先生の著書論文は別表の如く頗る多い。その點先生は仲々の健筆であつた。その中でも昭和九年に刊行せられた『宗學要論』は、非常に力のこもつたものであつて、眞宗概論的な恰好の著述の少い中に、特異な位置を占めるものである。また晩年の著述である『教行信證述要』は、『教行信證』の註釋書としてまことに手ぎはよくまとめられていて、教行信證を拜讀する最もよき案内書である。かくの如き述作は先生の長い生涯を費した學問的集積の上に產み出されたものであつて、表に出たものよりも、その背景の廣さと深さを泌々と感ぜしめる。また大谷派最高の學階たる講師に任ぜられてから多年に及んだ為、安居の本講を勤められたことも數多く、それらの講本がのこされている。その中、特に注意せられるのは『淨土文類聚鈔』の講本であつて、先輩の講說を消化しきつた上での講義は發揮するところ多く、先生の多くの著述の中でも、殊に注意すべきもの

である。

更にのこされた論文の數は枚擧に遑がないけれども、特に印象にのこるのは、先生の晩年になられてから發表せられた數多くの行信論に關する論稿である。これらの論文は一篇一篇が獨立的な意味を持つているけれども、更にそれらの論稿を綜合して考へると、そこに先生の行信論の體系が構成せられているのであつて、我々に幾多の教示を與へるものである。

こうして先生の生涯を省みると、先生は純粹に學問一筋に生き拔かれた美しい信心の人であつた。その先生は今はない。ただ念佛してその遺德を追憶するのみである。

香曉院大須賀秀道講師略年譜

明治　九年（1歳）　二月五日、靜岡縣小笠郡大須賀町善福寺に父順敎の五男として生る

二七（19）　七月、占部觀順師を訪うて諸義を病床に聽く

三三（25）　七月、眞宗大學卒業。眞宗京都中學宗餘乘科教授に囑託せらる

大正　七（43）　八月、眞宗大谷大學教授となる

一一（47）　七月、安居次講に觀心本尊鈔を講ず

昭和　二（52）　四月、大谷大學專門部長兼任

五（55）　五月、大谷大學專門部長を辭す

一一（61）　五月、侍董寮出仕を命ぜらる

八月、講師の學階を授けらる

一三（63）　三月、大谷大學學長に任ぜらる

七月、安居本講に淨土文類聚鈔を講ず

一六（66）　七月、安居本講に散善義を講ず

九月、大谷大學學長を辭す

同　大谷大學學部教授を囑託せらる

一八（68）　九月、大谷大學學部教授囑託を辭す

一九（69）　十月、大谷大學名譽教授の稱號を授けらる

二四（74）　七月、安居本講に蓮如上人御一代聞書を講ず

二九（79）　正月十五日、發病

三月十四日、生前院號として香曉院と稱することを許可せらる

三七（86）　二月十八日、逝去

著作目録抄

佛敎讀本　精道學舍　明治36

信仰講話　法藏館　明治39

妙好人百話　法藏館　明治40

香樹院敎訓集　法藏館　明治41

歎異鈔眞髓　法藏館　明治43

龍溫語錄　法藏館　明治43

香山院師修道訓　法藏館　明治45

香山院師僧道訓　法藏館　大正元

香樹院譬喩集　法藏館　大正元

聖德太子傳講話　法藏館　大正3
正信偈講義　法藏館　大正9
觀心本尊鈔講錄　安居事務所　大正11
大乘起信論講義　法藏館　大正
眞宗教義の本質及その表現　法藏館　昭和4
二河喩概說　法藏館　昭和4
三心釋講要　法藏館　昭和4
宗學要論　丁字屋書林　昭和9
教行信證講話　法藏館　昭和11
淨土文類聚鈔述義　安居事務所　昭和13
教行信證述要　眞宗典籍刊行會　昭和14
散善義述義　安居事務所　昭和16
蓮如上人御一代聞書講要　安居事務所　昭和24
自然法爾講話　新光社　昭和27
大須賀秀道講話集　百華苑　昭和30

論文目錄抄

（論文題目）	（發表機關）	（所載年月）
選擇集の成立について	佛教研究二ノ三	大正9・7
淨土文類聚鈔について	佛教研究四ノ三、四	大正12・12
三經釋と選擇集の對檢	佛教研究五ノ三、四	大正13・12
他力の意義	佛教研究六ノ二	大正14・4
他力一念の內省的意義	佛教研究七ノ一、二	大正15・7
淨土論の譯本について	大谷學報八ノ四	昭和2・10
香樹院について	大谷學報九ノ三	昭和3・10
眞宗學の印現說について	大谷學報一一ノ四	昭和5・10
宗祖の三願轉入について	宗學研究三	昭和6・11
三願轉入と二願分開	大谷學報一三ノ一	昭和7・1
蓮如上人の婦人觀	宗學研究特輯号	昭和7・8
三願轉入と穩顯釋	宗學研究六	昭和8・4
選擇本願に就いて	大谷學報一四ノ二	昭和8・4
他力轉入の內容に就いて	大谷學報一四ノ四	昭和8・10
能所義の檢討	眞宗論攷第三輯	昭和9・2
信樂に一念あり	宗學研究九	昭和9・12
行の回向より見たる本願	大谷學報一六ノ一	昭和10・3
金澤文庫所藏の隆寬律師遺書と親鸞聖人の教義	宗學研究一〇、一一、一二、一四	昭和10・5
他力救濟の眞實性に就いて	大谷學報一七ノ一	昭和11・2
眞宗に於ける廢立義に就いて	大谷學報一八ノ一	昭和12・2
親鸞聖人と四天王寺	四天王寺	昭和12・4
眞宗と日本國家	宗學研究一二	昭和13・10
眞宗學の特質	宗學研究一九	昭和14・11
高倉學寮學事史に就いて	眞宗學會報一一	昭和15・2
知恩報德の義	宗學研究	昭和15・6
眞宗に於ける厭穢欣淨の心	大谷學報二二ノ一	昭和16・3
教の眞實性に就いて	大谷學報二三ノ三	昭和17・5
眞宗の本迹思想について	宗學研究二五、二六合併	昭和18・6
思案の力	聞　思後刊第一號	昭和35・1
眞宗教學の歸趨	大谷大學編「親鸞聖人」所載	昭和35・3